

寄稿

長久保赤水顕彰会長

佐川 春久

高萩市出身の江戸時代の地理学者、長久保赤水（1717～1801年）の「赤水図」を活用した授業に、ゲストティーチャーとして呼ばれ参加した。

1月20日に行われた県立八千代高等学校（根本雄一校長）の「地理B」の授業では、高校卒業前の地理学習のまとめに、郷土の地理学者が挑んだ偉業の成果である「改正日本輿地路程全図」（赤水図）を使って、読図力を育むことを目的に新たな手法で行われた。

初めに、高柳元教諭から「赤水図」と現代の地図帳

を使って比較読図の授業が行われた。秋田県の八郎瀧は「赤水図」ではどのように描かれているか。日本三大河川の利根川は「赤水図」において、何と表記されているかなど10の課題に合わせて学習を進めていった。現在は、埋め立てられてしまった八郎瀧には、広い湖面が描かれていた。また、鳴門の渦潮はぐるぐる

と田が描かれ、那智の滝は実際に滝が落ちているように描かれていることなどを伝えた。また「赤水図」以前の地図は、お殿様が領地や耕地などの分布を把握し、戦や税を徴収するために用いたが、赤水が天文学の知識を取り入れ、日本初の経緯線が記載されている。このため街道を旅する人だけでなく、物流・経済活動にも使われていた特色を紹介した。さらに現在の神奈川県浦賀沖にペリー艦隊が来航時（1853年）も、江戸の庶民や幕末の志士たちが見ていたのは「赤水図」である。伊能忠敬の「伊能図」は江戸幕府の秘密の地図であったため、明治初年ごろ

高校授業で「赤水図」活用

利根川は坂東太良川と表記されていたことなどを楽しみながら学んだ。

入り日本地図を製作・発行したことで、大衆化した。携行用地図を工夫し、24分の1に折り畳み、利便性を高めている。詳細な地理情報により、旅や道案内、場所の確認など観光活用だけでなく、活火山や河川・沿岸の防災情報も併せ持つ。特に河川が非常に詳しく書かれ、港から港までの距離

最後に、私からは黒板に揭示した2倍に拡大した「赤水図」の第2版、1791（寛政3）年を示しながら、注目してほしい事例をあげた。当時、噴火していた浅間山や阿蘇山などは噴煙の様子が描かれていた。今後も、小・中・高等学校や関連施設などのお声がけがあれば、長久保赤水と「赤水図」活用を広めるため、可能な限りどこへでも私自身がボランティアで出向きたいと願っている。